

1. テキスト

「内部知覚について」「六」の第5段落。125頁終わりから1行目から127頁3行目まで。

2. テキスト要約

(第5段落)

「人為的に作られたもの」においては形相、質料、作用（そして目的）が別々であるが、自然物（西田の言葉では「生物」「生ずるもの（これはピュシス即ち自然を念頭に置いた言葉であると思われる：引用者）」においては形相、作用、目的が一つになって、「形相其者が働く」。それでは形相と質料の関係はどうか。西田は質料も「単に受動的とは云えない」、「質料も一種の形相」と述べ、「質料とは潜在的形相に過ぎない」とする。アリストテレスは生物を存在の基本に考え、そうした生物の魂を形相と考え、これと質料である身体（ソーマ）を必然的な関係において考えていた。魂の質料としての身体と魂のない物体（ソーマ）はどちらもソーマであるが、彼はそれを同名異義語と考えていた。その意味で質料は潜在的形相というのはアリストテレス解釈としても当を得たものと言えよう。しかし西田は「潜在的形相即ち質料が一般的となり現実的形相即ち働く形相が特殊となる」と述べる。こうして西田はアリストテレスの第一質料を最も普遍的な形相、すなわち無定形無限定の無ともいべき形相と考えることになる。こうして〈不動の第一動者〉としての純粋形相から種差を加え、〈第一質料〉に至る上から下への形相の特殊化の階梯と、逆に純粋質料としての〈第一質料〉から〈不動の第一動者〉に至る下から上への形相の特殊化の階梯が考え得ることになる。

次の「人為的合成物に於ては、一般と特殊との結合が偶然的であって、外から与えられる」とは、例えば彫刻家が外部から大理石とヘルメス像を結合することを言う。大理石からはヘルメス像もダビデ像も制作可能であり、ヘルメス像は大理石からも銅からも制作可能であり、質料と形相の結合は偶然的である。この内ヘルメス像が大理石からも銅からも制作可能であると考えるのが形相を一般と考える考え方で、大理石からヘルメス像もダビデ像も制作可能と考えるのが質料を一般と考える考え方ということになるだろう。

これに対し「生物に於ては、その結合が必然的であって、種差が内から与えられる」とは形相である魂と質料である身体が必然的な関係にあることを言う。質料と形相が一体となったところから「形相其者が働く」。それが同時に「一般的なるものが自分自身にて特殊化することを意味する」。個体としての生物を考えるならば、例えば受精卵が細胞分裂を繰り返しながら次第に分化することを考えてもいいし、普遍的な生命を考えれば、種の分化を考えることもできるだろう。かくして「一般的なるもの其者が特殊化の原理」であり、「形相が形相を生む」ということができるのである。

「併し生物には尚外界というものがある。此意味に於て尚純なる作用ではない、潜在的なるものが先立つということが出来る」といわれるのは、例えば個体としての生物にしても普遍的な生命にしても、常に環境の中に置かれ、純粋な形相に成り切らないことを指す。例えば種から苗にまで成長し、現実態になったとしても質料を纏っており、純粋な現実態にはならない。こうして自然は個体としても全体としても繰り返すのみである。永遠を志向しながら永遠そのものになることはない。これに対しアリストテレスでは神のみが純粋形相、純粋現実態であり、我々人間も垣間見る仕方ではあるが、こうした在り方（テオーリアー）に与ることができるとされる。西田も「唯、精神作用に於てのみ、真に質料を内に包み、形相が質料に先立つということが出来る、質料其者が直に形相となる」と述べる。ここではアリストテレスのテオーリアーが「思惟の思惟（ノエシス・ノエセオース）」であったことの内に西田は「自覚」を見ようとしているのである。

ここまで「精神作用」が一般的なるものの特特殊化（これを自己限定と解してもよいかもしれない）であることが言われてきた。しかし西田はこの「一般的なるもの」から「具体的一般者」を除外しようとする。これまで「具体的一般者」の例として挙がってきたのは「色」、「空間」、「物理的世界」（以上例えば113, 115）、「先験的認識の世界」（124）であった。色について、「白が黒に変わる背後にあるもの」とは「色」であり、「色の体系」であり、以前「性質的なるもの」（101, 106 など）と呼ばれたものである。これが一般者の特特殊化として判断の主語となる

のである。かくして「変じ行くすべての点が判断の主語となる」といわれる。そうしてその各々の点が「識別するもの」であるとされる。これは「色」が「視覚作用」となることである。

「色」が「視覚作用」となるとは「全然我を没し尽して、主客合一となる所に有を見る」ということである。これは我を立てておいて色を見るという普通の知覚ではなく、また直接経験ないし内部知覚でもない。こうした直接経験は現在に届かない。この「届かない」というところに「立場の超越」(80)、即ち「全然我を没して、主客合一となる所」が逆に開ける。それが「有」である。「視覚作用」が「純なる作用」となって「色」となることである。その時「色が色自身を見」(104)、色が「白と黒を識別する」(126)のである。こうして「一般的なるものが主語となる場合に於ても、一般者が至る処に自己自身について述語すると云い得るでもあろう」(同)といわれることになる。

しかし「具体的一般者」は「厳密なる意味に於ての精神作用」ではないとされる。何故か。「部分が全体に等しいと云い得るかも知らぬが部分が全体を含むとは云われない」からである。「個体」(個物)が成立していない、ということである。その例として「空間」が挙げられている。これまでの叙述からすれば「色」ないし「視覚作用」も「厳密な意味に於ての精神作用」ではないことになる。

そうして「厳密な意味に於ての精神作用というのは、自分の中から自分を作るものでなければならぬ」といわれる。ここではアリストテレスのエネルゲイアが念頭に置かれていると考えられる。そうして「潜在的なるものが現実的なるものに先立つ限り」とあるのは個物(物)の場合であり、それは物としての運動(キーネーシス)を行うのであって、それは厳密な意味に於て魂の活動(エネルゲイア)、即ち「精神作用」ではない、目的を外に置いた運動、即ち「対象化せられた合目的作用に過ぎない」というのである。精神的作用の例として「道徳」と「芸術」の例が挙げられている。どちらも一方から見れば完成を目的とし、それを目指して訓練され、教育され、また自ら修練し学習していくものであるが、人為的な目的を設定しこれを現実化しようとするれば道徳も芸術もその意義を失ってしまう、というのであろう。それは物体の運動(キーネーシス)であって、魂の活動(エネルゲイア)ではないというのであろう。